

# キューバ ソ連

## 関係の新しい展開

——●田 中 高

### はじめに

キューバは今年、革命30周年を迎えた。「ヤンキー帝国主義」の目と鼻の先、フロリダ半島からわずか140キロメートルに、武闘革命によって社会主義政権が成立したことは、世界史上でも特筆すべき事件であった。加えて、1962年のいわゆるキューバ危機をめぐる米・ソ2超大国の確執は、第2次大戦後の国際政治の潮流を大きく変えることになった。そのとき世界は、核戦争一触即発の危機を経験したのである。過去30年間カストロ政権は、アメリカ合衆国の封じ込め政策の下で、革命の最も重要な目標である「革命政権の存続」に成功してきた。そのうえに、アンゴラ、エチオピア、グレナダ、ニカラグアに兵士、軍事顧問を派遣して、第3世界に対する外交では、その独自性を発揮してきた。

時あたかも社会主義陣営の盟主国であるソ連では、ゴルバチョフ書記長による「ペレストロイカ」「グラスノスチ」など斬新で意欲的な体制建て直し政策が進められている。キューバは過去30年間ソ連に依存を加速度的に強め、カストロ自身、ソ連の経済・軍事援助なしには、革命の存続は不可能であったと認めている。ソ連で進められている諸改革は、このようなキューバとの関係について見直しを迫ることになろう。本稿はこの点について、今年4月にゴルバチョフ書記長がハバナを訪問した際の、4月4日人民

議会での両国首脳演説(末尾に資料として抄訳を掲載)に触れながら検討することにした。

### 1 キューバ・ソ連の経済関係

まずキューバ・ソ連両国間の経済関係について概観することにした。第1表は、1958年(革命成立前年)から86年までの両国の経済関係を示したものである。上段から順を追って説明すると、(1)キューバの対ソ連輸出比率は、58年の全輸出額の2%から急速に上昇し、80年代の初期に若干減少したが、後半に入ると70%台を保っている。同じく(2)ソ連からの輸入比率は、革命前にはゼロであったものが、急激に増加し、80年代には70%弱で推移している。(3)対ソ連貿易収支は、58年、75年、77年、78年を除いてキューバ側の赤字であり、近年その額は増大する傾向にある。86年については13億8000万ペソ(1ペソは公定レートで約1.3ドル)に達している。(4)キューバは石油の国内消費の一部を自給しているが、大部分をソ連の石油に依存している。85年の輸入価格はトン当たり193ペソであった。キューバはソ連から国際価格よりも安く輸入した石油を再輸出しており、ハード・カレンシー(交換可能通貨)収入の40%を占めている。(5)キューバの最大の輸出品である砂糖の輸出価格。ソ連はキューバから国際価格を上回る水準で購入しており、石油の廉価供給と並んで経済援助の重要な要素である。86年にはトン当たり862ペソと

なっている。(6)砂糖と石油の交易条件。75年を100とした場合、年を追うごとにキューバに不利になっている。すなわち、砂糖の輸出価格は低迷し、石油の輸入価格は上昇している。(7)砂糖の対ソ連輸出比率。80年代後半には、ソ連向け砂糖の輸出額は、全砂糖輸出額の80%台を占めるに至った。(8)キューバの対ソ連輸出品価格インデックス。75年を100ポイントとすると85年には202ポイントとなったが、86年には180ポイントに悪化している。(9)対ソ連輸入産品価格インデックス。85年には273ポイントに上昇している。(10)対ソ連交易条件。前項(9)を分母、(8)を分子に取ったものである。キューバは1975年以降、特に80年代に入って、対ソ連貿易で不利な立場に立たされている。

第1表から分かることは、次の3点である。まず第1に、キューバは輸出入額の70%をソ連

に依存していること。第2に、キューバの対ソ連貿易赤字は近年大幅な増加傾向にあること。第3に、両国の交易条件は、年を経るごとにキューバにとって、不利になっていることである。ソ連の対キューバ経済援助は、CIA(米国中央情報局)の推定で1986年に、56億9500万ドルとされている。内訳は、開発援助17億2000万ドル、貿易補助金39億7500万ドル。前者は、貿易信用に類するので、ほぼ無償に近い形の、長期の低利ローンである。後者は、キューバの輸出品への、買上げ価格による補填やソ連産石油を廉価で輸入し、第三国へ国際価格で再輸出する際の利ザヤなどである\*。

\* 『ソ連東欧調査月報』1989年4月号。

ソ連は対途上国向け援助の50%をキューバに向けている。キューバにプライオリティを置く理由は次の諸点である。まず第1に、キューバ

第1表 キューバ・ソ連経済関係、1958~86年

	1958	1965	1970	1975	1977	1978	1979	1980	1981	1982	1983	1984	1985	1986
キューバの対ソ連輸出 (%)	2	47	50	56	71	73	68	56	56	67	70	72	75	74
キューバの対ソ連輸入 (%)	0	49	53	40	54	65	68	63	63	68	68	66	67	70
キューバの対ソ連貿易収支 (100万ペソ)	14	-106	-162	412	208	168	-143	-650	-876	-455	-364	-830	-937	-1,380
キューバのソ連石油購入価格 (トン当りペソ)	-	-	18	39	51	66	75	83	103	126	147	174	193	-
ソ連のキューバ糖購入価格 (トン当りペソ)	71	134	131	482	490	599	589	743	605	625	873	868	987	862
キューバの対ソ連交易条件砂糖・石油 (1975=100)	-	-	59	100	77	73	63	72	48	40	48	40	41	-
キューバの対ソ連砂糖輸出 (輸出額に占める%)	3	57	52	58	77	80	76	62	59	73	76	77	82	82
キューバの対ソ連輸出価格指数 (1975=100)	-	28	33	100	101	123	121	149	131	133	180	179	202	180
キューバの対ソ連輸入価格指数 (1975=100)	-	-	57	100	113	127	130	145	168	198	222	252	273	-
キューバの対ソ連交易条件 (1975=100)	-	-	57	100	90	97	93	103	78	67	81	71	74	-

(出所) Jorge I. Domínguez, *To Make a World Safe for Revolution*, Harvard University Press, 1989, pp. 86-87.

の戦略的な重要性が挙げられる。米国の至近距離にあるだけでなく、カリブ海の重要な海上交通路にあり、軍事情報の収集基地としても計り知れない価値がある。第2に、ソ連が非同盟運動におけるキューバの役割を高く評価していること。第3に、アフリカ大陸などの地域紛争で、キューバの果たした役割に対する報奨としての援助。最後に第4として、ソ連援助のショーケースとして持つ重要性がある\*。ソ連援助について一言付け加えると、その内容は、必ずしも常にキューバにとって有利ではない。第1表にもあるように、交易条件は近年著しくキューバにとって不利になっている。キューバは対ソ連貿易の悪化を回避するため、砂糖の輸出先をシフトする努力をしたが、十分な成果は上げなかった。このようなことを反映して両国は、1980年代の初め、経済問題をめぐって、緊張した時期を迎える。

\* Carmero Mesa-Lago and Fernando Gil, "Soviet Economic Relations with Cuba," Eusebio Mujal-León, *The USSR and Latin America*, UNWIN HYMAN, 1989年, 225ページ。

## 2 キューバの経済政策

上述のようにキューバは革命後一貫してソ連への経済的依存を強めていった。ソ連はキューバにとって、その死活を左右する存在となった。こうしたなかで、1985年に発足したゴルバチョフ政権は、周知のように、国内経済建て直しを図るため、経済の開放化、自由化、分権化方向のペレストロイカ、グラスノスチ、外交面では、東西デタントの推進、東西陣営に対する自主性の尊重など「新思考」外交を進めている。

このようなソ連における一連の改革運動、新路線が推進されていくなかで、衆目の関心事となっているのが、キューバとソ連の関係が、今後どのように変化するか、ということである。今年4月のゴルバチョフ書記長のキューバ訪問の際、西側

の報道陣が注目したのもこの点である。そして両国関係の悪化や、危機がまことしやかに喧伝された。本稿ではこのような見方が、一面的なものであることを指摘する。キューバの経済政策について簡単に振り返りながら、キューバ・ソ連関係の変化について検討することにした。

キューバでは1970年代、一部工業製品の自由販売や、農牧産品の自由市場の設立など、市場メカニズムの部分的な導入が試みられた。1976年には、経済計画・運営新システム (SDPE) によって、中央政府の分権化、利潤原理の導入が図られた。これらの改革は、リーベルマンの提案を経て、65年にソ連で導入された経済効率化政策と近似している。しかし一連の改革は官僚機構の抵抗、腐敗、労働者、農民の間の所得格差の拡大、自由市場と政府価格の乖離、また外貨不足による経済統制の必要によって頓挫する。カストロは86年2月の第3回共産党大会において、自由化路線から後退して、「修正運動」を開始し、中央集権的な経済運営、革命イデオロギーの強調に回帰した。

この点について、西側の報道機関は、ゴルバチョフのペレストロイカとキューバの「修正運動」の対蹠性を過度に協調しすぎた嫌いがある。西側のキューバ専門家はほぼ一致して、1986年を前後にして行なわれたキューバにおける経済政策の変更が、70年代に始められた、自由化政策を完全に払拭したものであるとか、ペレストロイカと対立し、両国間に、摩擦を生じさせる性質のものとは、見ていない\*。「修正運動」はそれまでの経済政策のゆきづまり、第2次石油ショック後の厳しい国際経済環境を乗り切るための、一時的な措置と考えられている。これを裏づけるように、カストロは「修正運動」を説明する演説のなかで、就中、老化した官僚層の不能率、腐敗を攻撃し、新しい世代のテクノクラートがこれに取って代わるべきであると指摘している。カストロの狙いの一つは、既得権に安住して、硬直化しがちな、古い官僚層を更迭することであったと見ることができよう。7月に入ってオチョア将軍などの軍の最高幹部が、

麻薬取引に関与して、処刑された事件でも、軍や政府部内における人事停滞によって生ずるさまざまな問題を解決する手段と解釈することも可能である。また、キューバ経済の自由化、分権化については、「キューバ革命の改革の過程においては、再び、近い将来、権限分散化、自由化に向かうであろう」と言う指摘もある<sup>\*\*</sup>。この点については、91年から始まる第5次5カ年計画の内容が注目されるよう。

\* Rodolfo Cerdas Cruz, "New Direction in Soviet Policy toward Latin America," *Journal of Latin American Studies*, Vol. 21, 1989年; Frank T. Fitzgerald, "The Reform of the Cuban Economy, 1976-86: Organisation, Incentives and Patterns of Behaviour," 同上書所収; Andrew Zimbalist, "Incentives and Planning in Cuba," *Latin American Research Review*, Vol. XXIV, 1989年。

\*\* Zimbalist, 同上論文, 91ページ。

キューバは既述のように1986年を前後して、従来の経済の一部自由化路線から中央集権化、革命イデオロギーの称揚に向かった。興味深い事実は、この時期も、対外的には比較的資本主義的で市場志向の強い経済政策が進められたことである。カストロ政権は、砂糖の輸出先を多角化する努力や、パナマに国営の商社を設立したり、西側の観光客を誘致したりした。キューバ経済が砂糖という国際商品に大きく依存していることから考えても、孤立した経済運営を長期にわたって取り続けることは困難である。「ペレストロイカ」の波が、いずれキューバを襲う可能性はあると見てよい。もう一点見逃せないことは、キューバの対西側債務である。88年には、64億ドルに達しており、カストロ政権は返済に困難をきたしている。何らかの形で、西側債権団の意見を聞き入れる、といった事態も否定できない。

これまで、経済面におけるペレストロイカの影響を検討したが、次に、政治面における影響について見ることにしたい。

### 3 ペレストロイカは諸刃の剣

4月2日から5日にかけて、ゴルバチョフはキューバを訪問した。ソ連共産党書記長としては、ブルジネフ以来15年ぶりである。ゴルバチョフ書記長のハバナ訪問をめぐって、西側のマスコミはさまざまな観測記事を流した。その内容は、ペレストロイカによって、両国関係に摩擦が生じている。ソ連の対キューバ、ニカラグア援助に変化があるのではないか、といったことである。カストロ自身が、演説のなかで、書記長の今回の訪問について、マスコミが間違った報道をしており、両国の友好関係には、変化がないと、わざわざ強調している。

カストロは演説のなかで、「もしある社会主義国が、資本主義を建設しようとするならば、私たちはその権利を尊重しなければなりません」と述べている。この言葉を、やや穿って解釈すると、カストロのソ連に対する当て擦りと見ることもできよう。だが、筆者は、この言葉の裏に隠れている、カストロのキューバ社会主義の独自路線への強い願望を感じる。カストロがこのことによって表明したかったのは、各国の主権を尊重せよ、ということではないか。キューバの独自路線の希求は、ソ連との関係を歴史的に一瞥しただけでも窺い知れることができる。

キューバ・ソ連関係が革命後、一貫して、良好であったと見るのは、誤りである。1962年のキューバ危機の際には、米国・ソ連の間で、キューバの頭越して解決されたことに、カストロは激怒する。68年のチェコスロバキアの動乱時、カストロがソ連の行動を支持したのは、ソ連の石油供給によって揺さぶりをかけられていたことが大きかった。79年のソ連軍のアフガニスタン侵攻の時は、キューバはソ連支持に回ったが、非同盟運動におけるキューバの地位失墜にカストロは焦心した。最近では83年の米国のグレナダ侵攻をめぐりキューバ・ソ連間に亀裂が生じた。カストロはキュー

バ兵に対し最後の兵まで戦うように指示したが、ソ連は即時降伏を指示している。両国間の経済関係が悪化していた85年、チェルネンコ書記長の葬儀にカストロは、過労を理由に欠席している。この頃、ソ連・東欧諸国は、対キューバ援助を削減していたのである。

\* Jorge I. Dominguez, *To Make World Safe for Revolution*, Harvard University Press, 1989年, 第4章, 第8章, 第9章。

カストロ演説に戻ると、ゴルバチョフについて、「偉大な配慮、偉大な尊敬、偉大な平等の念をもって私たちと接しました。これは、共産主義、社会主義運動の歴史のなかでも正に、希有なことです。巨大で強力な国家を代表するにもかかわらず、決して距離を置いて接するのではなく、また、利己的な行動をするのではなく、覇権主義の立場にあるという印象を受けませんでした」と述べている。ソ連の「新思考」外交のなかで、東側同盟国の自主性が尊重されるようになってきた。このような動きを熱いまなざしで見守っているのは、キューバにほかならない。カストロは現在のソ連共産党を絶賛しているが、外交辞令ではなく、言葉どおりに受け取ってもよいであろう。キューバが反発したのは、社会主義陣営内の主権にある程度の制約を加える、ブレジネフ・ドクトリンであった。引用した、ゴルバチョフ路線が「共産主義運動、社会主義運動の歴史のなかでも正に希有なこと」というカストロの言葉が、これを反証していると考えられる。

キューバの懸念材料は、ペレストロイカによって、ソ連の援助が削減され、その内容が、キューバにとって不利になることである。しかし、両国間の経済関係は、過去何度も悪化しており、キューバはそれを克服してきた。経済活性化の自助努力が要請されるにしても、このことは、キューバの政策担当者が知悉しているところである。問題は、今後キューバ政府がどのような処方箋を見出し、実行に移していくかにかかっている。

一方ゴルバチョフは、演説のなかで、社会主義

の多様性について述べている。また両国関係よりもむしろ、地域紛争に多く言及している。特に中米紛争については、3月にエルサルバドルで行なわれた中米首脳会議の決議を支持し、「ラテンアメリカ」の域内努力による解決の必要を表明している。キューバは、その外交政策の独自性を発揮するうえからも、「ニカラグア人民とパンを分かちあう」援助を継続するかもしれない。対ニカラグア援助はキューバ外交の試金石となるであろう。

ペレストロイカやグラスノスチは、対キューバ経済援助の見直しや、キューバにとって耳の痛い援助議論の内容が公表されるというマイナス面を持つ。他方、キューバ革命後30年間にわたって追及してきた、独自路線の原則にとっては、プラスとなろう。この意味で、「諸刃の剣」と言えそうである。

〔追記〕 本稿の一部は、今年5月27日南山大学ラテンアメリカ研究センターで報告したものを、加筆訂正したものである。有益なコメントを頂いた、松下洋、皆川修吾の両氏をはじめ、出席された方々に、この場をお借りして謝意を表したい。内容についての責任は、全て筆者にある。

### カストロ演説 (抄訳)

私たちは、ソ連とゴルバチョフ同志が、何を考えているか、国際政治の新しい考え方であり、問題の焦点となっている「新思考」の意味を理解しています。私たちはいまだに、帝国主義がこの新しい国際的な思考に同化しているという、十分な証拠を持っているわけではありません。それどころか、その行動を信頼できない多くの理由があります。アフガニスタン問題の解決についての、合衆国の態度がよい例です。関係国がジュネーブで合意に達し、ソ連がこれらの約束を履行しているにもかかわらず、合衆国は、反革命勢力に対し、武器を供与する権利を留保しています。南西アフリカではアンゴラ、南アフリカ、キューバの間で

合意に達し、重要な段階に入ったばかりであります。しかし、合衆国は依然としてUNITAに対して武器を供与する権利を留保しています。私たちは中米各国が紛争の政治的解決を見出すために努力してきたことの証人ですが、合衆国は、ちょうどニカラグア政府と人民に対して軍事的圧力を加えるように、ホンジュラス領内でコントラを維持する権利を留保しています。私たち自身については、最近、合衆国は公然と私たちへの敵対政策の継続を宣言しています。私たちは、国防のために巨額の出費を強いられています。

両国人民と第三世界の人民、国際世論は、国連において帝国主義に対し、各国の主権を尊重するように要求することが責務です。合衆国に対し、合法的な政権を転覆するための、非正規勢力への武器の供与や援助を中止するよう要求せねばなりません。第三世界の国々は近年、対外債務、不平等な国際貿易の問題を解決する戦いをしています。私たちは、軍縮と平和の戦いと結びついた対外債務の解決と、新国際経済秩序の確立の必要性について、ソ連の明確な支持を受けました。この点は、昨年12月、ゴルバチョフ同志が国連で表明しているところでもあります。

ゴルバチョフ同志の訪問に関連して、今一つ触れる点があります。それは、ソ連において、蓄積された科学・技術の大きな潜在力を応用しながら、経済面の困難を克服し、社会主義を前進、発展させる大胆な努力についてです。ゴルバチョフ同志のキューバ訪問については、さまざまな憶測がとび交ってきましたが、私は、どこからソ連・キューバ関係の危機、ゴルバチョフ同志と私の不和が喧伝されるのか分かりません。私には、それはある種の人々の幻想から生まれているように思われます。国際政治でキューバとソ連にはいかなる相違も不和も存在せず、また、両国がそれぞれ国内で行なうことについては、いかなる種類の不和の理由さえ存在しません。

今日、社会主義各国は、それぞれ独自のマルクス・レーニン主義の理解によって、その社会主義

を完全にしようとしています。各国は、それぞれが独自の方式を適用することを試みています。ゴルバチョフ同志は、この原則を擁護しています。もしある社会主義国が資本主義を建設しようとするならば、私たちはその権利を尊重しなければなりません。同様に、誰も、先進国あるいは途上国の資本主義・半資本主義国が主権によって社会主義を建設すると決定したことに、介入する権利を持たないことを要求します。それぞれの人民と国家の主権的な意志を無制限に尊重するという原則は、マルクス・レーニン主義の鉄則です。

私とゴルバチョフ同志との話し合いは常に和やかで、私のみならず、話し合いの内容を伝えた執行部の全ての同志に、深い感銘を与えました。ゴルバチョフ同志は、偉大な配慮、偉大な尊敬、偉大な平等の気持ちをもって、私たちと接しました。これは共産主義、社会主義運動の歴史のなかでも、正に希有なことです。巨大で強力な国を代表するにもかかわらず、決して距離をおいて接するのではなく、また利己的な行動をするのではなく、覇権主義の立場にあるという印象を受けませんでした。これは手本となるものです。両国関係の歴史において、友好協力協定に署名するのは初めてのことです。しかし、両国間に友好と協力が存在しなかったのではなく、従来からまた将来も存続し続けるものです。そしてそれは、次第により大きなものとなります。この機会に、ソ連の提案により私たちは正式にこうした性格の協定に署名する名誉をもったのであります。両国関係についての悪意に満ちた噂や誹謗に対するこれ以上の返答はありません。

両国関係はあらゆる方面できわめて良好に発展しています。もちろん、このような機会に、この30年間にソ連から受けた大きな協力を思い返さずにはられません。私たちにとって、国防上に必要な武器の供給の分野で、ソ連との連帯が持つ意義についてまだ述べていません。もし今日私たちが、正義と自由と独立のために戦う能力に、信頼をもてる水準にあるとすれば、それはソ連の寛大

な援助を受けているからです。それゆえに、私たちのソ連国民、ソ連共産党、現在ゴルバチョフ同志が指導するソ連執行部に対する感謝は、永遠のものであり、本日私たちが心から表現できるせめてものことは、ゴルバチョフ同志、ソ連共産党の成功を願うことです。私たちはこの成功を願うだけでなく、必要としています。キューバだけではなく、第三世界の全ての人民、人類全体が、この成功を願いかつ必要としています。

### ゴルバチョフ演説（抄訳）

ソ連はキューバ社会主義との友好関係を評価しています。キューバとの連帯、両国間の協力協定は、時間の試練を経てより強化され、政治、経済、文化の分野で、ソ連とキューバの協力関係に新しい地平線を拓くものです。私たちの視点、解決法が唯一のものとは考えていません。各政党は、それぞれの考え方や、その国の特殊性によって、独自に解決の道を歩み、これらの多元的で多様な視点が、国際社会主義の経験では、全ての人々にとって、より迅速に前進することを促すのです。この意味において、私は、カストロ同志が重要でありかつ、これからせねばならないと語った全てに、同意するものであります。

私は明確に、革命あるいは反革命を非道に利用することを正当化する理論、路線、また各国に対する外国の干渉に反対します。このような原則によってのみ現在の地域紛争を解決し、将来の発生を防ぐことが可能となります。私は特に長期間にわたって、アンゴラの独立と領土保全に参加して

きたキューバ国際主義者の功績について触れたいと思います。アンゴラの独立を防衛したことだけが重要ではなく、ナミビアの植民地時代の恥ずべき遺産、隷属状態に終わりを告げる真の見通しを拓いたことも重要です。ソ連はキューバ、また国連加盟の全ての国とともに、ナミビア合意の履行を支持し、アフリカにおける植民地主義と、人種差別をきっぱりと終結させることに協力する用意があります。

数日前エルサルバドルで、中米首脳会談が行なわれました。その合意事項は、中米における和平を確立する、絶好の基礎となるものであると理解しています。特にコントラの解散と、ニカラグアが国内で民主化を約束したことは重要です。この意味で、対コントラ援助を継続するという決定に懸念が生まれます。私たちは、ワシントンでなされる、私たちとキューバ、ニカラグアの関係を曲解する性質の発言について、同意するわけにはいきません。私たちの、中米紛争への解決の視点は、一貫しています。私たちは、当事国全ての利益が均しく、外国の介入のない、自立した発展への権利が保証されるという原則の下で、ラテンアメリカ自身による解決がなされるべきと考えます。

滞在中、私たちは再度、ソ連とキューバの友好が、相互であることを確認しました。ハバナ市内の企業や政府機関の労働者、技術者との会話で、また公式非公式の話し合いのなかで、私たちは真の友人であると感じました。ソ連とキューバの友情がより深まり、両国の党と国家、人民の協力がより力づよいものとなることを希望します。

（たなか・たかし／四日市大学講師）